

15 葬儀

死に装束

葬儀は本人の希望で家族だけの密葬にした。妻の祖母の葬儀をしてくれた葬儀屋に、T 病院で看取る覚悟をした次の日(金曜日)に妻の姉が連絡を取って、一番すばらしいお棺を手配してもらった。実際に来たのは、総絹布張りの窓付きの棺だった。

看取りが終わって、家族全員が bed の上での悲しい別れをしたあと、だんだんと体温が下がっていく現実にもう命がないということを否が応でも知らされた。葬儀社には妻の姉が連絡した。

Bed side で小一時間過ごしたあと、個室に持ち込んだ荷物類を整理して車に積込むために搬出すると共に、病院の staff 達に engel care をしてもらった。娘も母の死を受け入れるために手伝えることになった。死に装束は妻が最初の入院の際に用意したが、その後冬物に入換えてあった。だが、この春にもう一度別の夏衣装に変わっていた。

2 時間ほどかかって死出の支度が出来上がると、まるで生きていたときのような懐かしい顔が微笑んでいた。私は妻に別れの口づけをし、放射線治療で薄くなった髪の毛をそっと撫でて手を握った。28 年前に妻と初めて都内の hotel で出会ったときの情景が思い浮かんだ。「彼女の人生の半分を私と過ごしたのだ。」という感慨が一瞬頭をよぎった。子供たちや他の家族も病室での最後のお別れをし、私は慟哭した。

主治医の K 医師が死亡診断書を書いてくれ、婦長からもらった。死因は「大腸がんの肝転移」である。診断書は保険の請求に必要なので、すぐに copy を取って、葬儀社に火葬許可証をもらう手続きのために渡した。

納棺

半時間ほどして、16 時ごろ、地下の霊安室に staff 用の elevator で降りた。妻は 2 週間強横たわっていた病室の bed から移動用の stretcher に移され、霊安室で迎えに来ていた葬儀社の専務と対面した。

妻の遺体をお棺へ移してもらって、全体を整える間少し待って、霊安室の祭壇の前に置かれたお棺に家族と今回の入院の主治医および病院の staff が白い菊を献花して decoration なしの霊柩車に乗せた。霊柩車の添乗は妻の母にお願いし、先立たれた自分の子供に別れを告げてもらった。火葬場へは翌々日の木曜日に予約を入れてもらい、翌日は一日中別れを告げることが出来るようにした。

妻が亡くなった朝から自宅に帰るまでの短い間だけ、この年の梅雨が明けない異常天候の空に日の光が戻った。天が妻のために雨を一時的に止めてくれた、と感謝した。

通夜

夕方には妻が寝ていた自宅の居間の bed の上にお棺を置き、通夜の準備をした。密葬としたので高齢の私の母も呼ばずに、家族以外は妻が生前自分で別れの電話をした岡山の親友だけが参加して、出前の寿司を取って夜の 20 時ごろ別れの杯を傾けた。わが家の父子 3 人にとってはこの日初めて口に入れる食事であったが、ほとんど喉を通らなかった。

夜 22 時ごろにはお開きとし、娘と岡山の親友がこの夜、私と倅が次の夜と分担して、終夜お棺に付き添うことにした。寝る支度が整ったあと、私は妻の棺の窓を開けて再度慟哭した。

翌日、娘と妻の岡山の親友は仮眠したあと身体と精神を休めに、近郊の温泉に行った。極度の精神の緊張を続けた最後の 3 ヶ月の疲れは簡単には取れないが、時間を見て身体と心を休

めないと、今度は看病した側が倒れてしまう。遠くからいろいろな人がくる場合は、葬儀をすぐ翌日にやるのも仕方がないが、その場合は通夜を一日送らせることになる。葬儀社には冷夏だったが dry ice をたっぷり用意しておいてもらった。二日目の通夜は倅と私で行い、交代で眠った。

生身とのお別れ、火葬場

妻の遺言で葬儀はしないことになっていたもので、木曜日の朝から火葬場へ出かける準備をした。

雨の中、お花の先生でもある岡山の親友は、庭の木や草から花を集めて、大きな花束を作ってくれた。故人が手入れし愛した庭の中で、死出の旅路を迎えるようにとの気遣いである。

副葬品は妻が準備したものだけでなく、杖や愛読していたが読み終わらなかった武俠小説など、遺族の思いも入れた。11時の火葬に間に合うように、10時40分ごろに家を出て、妻は救急車で自宅との別れに次いで、二度目の思い出の自宅とのお別れをした。

Decoration がない霊柩車を用意してもらったにもかかわらず、物見高い近所の老女が、激しい雨の中じっと人の家の入り口に立って中を監視していた。追い払ってもすぐ戻ってくる。火葬から帰った後、この老女の家の上に塩をたっぷり撒いてやった。

火葬場では最高級の特別賓館という場所を取った。よその葬儀の連中と隣り合わせなどは嬉しくなかったので、100人はたっぷり入れる space に岡山の親友を含めて7人で野辺の送りをし、骨を拾った。

骨は妻の母親の希望で、実家の墓に分骨することにし、大小二つの骨壺を私と妻の母が抱いて帰宅した。骨は非常にしっかりとしており、癌で死亡した多くの人のように脆くはなかった。妻の希望で大きい骨壺は自宅に安置してある。

連絡と埋葬

遺骨や花の配置を直してから、参列した全員でお茶をし、妻の多くの友人や知人に手紙や電子 mail で逝去の連絡を取った。妻の遺言で葬儀はやらないということだったので、終わってから連絡をした。

岡山の親友を駅まで送って行った後、夜に父子3人で焼肉屋へ出かけて、看病の慰労会をした。本来はぐっすり眠れるはずであるが、3時間ごとに目が覚める看病時の調子は、1ヶ月ほど正常にはならなかった。

分骨した遺骨は、百ヶ日過ぎまで実母の仏壇に置いておき、11月末の誕生日の前に妻の実家の先祖代々の墓に埋葬した。私が死んだらやはり分骨して、同じ墓に埋葬してもらうように頼んだ。さもないと、独りぼっちな妻が可哀想だからである。墓所に葬る費用は数十万円だったが、妻の母が妻に掛けていた保険金でまかされた。

死後の始末

葬儀の費用は、葬式をしなかったのが香典返しや諸雑費を含めて200万円には至らなかった。

家族が亡くなると、それまでの精神的な疲労に加え愛する人の死という現実の前に判断力が鈍り、いろいろな手口の業者が介入してくる。家族の状況が最悪の事態が不可避になったと判断したら、葬儀や相続その他の手順を simulation して置くことが肝要である。町会長をやっていたことがある妻の祖父の葬儀のときには、うっかり町内会の差配に任せたら、当時の金額で350万円という途方もない請求が来たとのことである。

死んだ後のことを本人が生きている内にあれこれと考えるのは不謹慎である、と思われるが、後の混乱を避けるために準備するのは必要なことである。これを機に私が死んだあとすべき

手続きのすべてを作っておくことにした。

この項終了
©2004 Dr.YIKAI